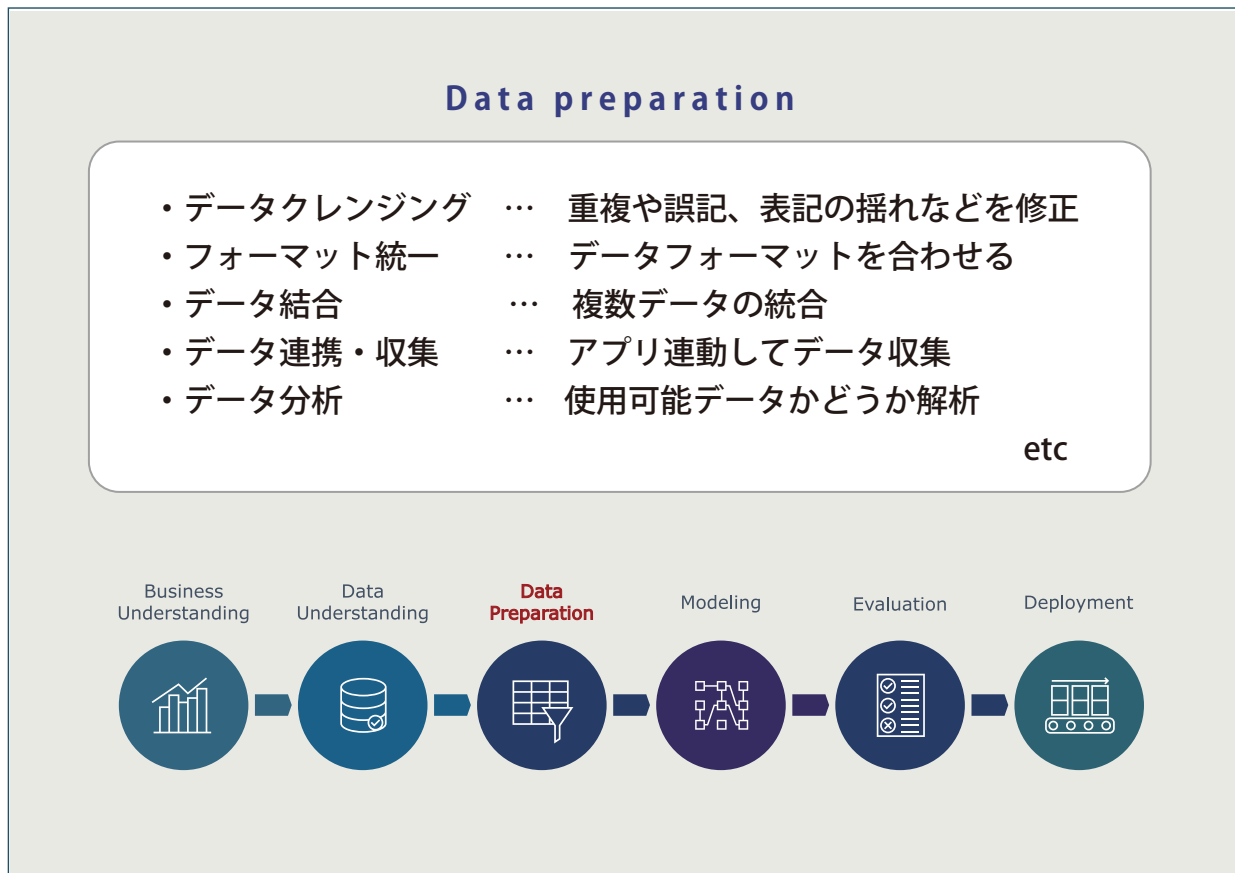


データプレパレーションの需要



RPA や AI が普及してくると、当然ですがインプットに使用するデータや、AI に学習させるためのデータが必要です。そのデータ収集や整形は、誰が担当すべきでしょうか？

RPA で業務自動化を目指す場合、使用するデータの多くはシステム担当ではなく、業務担当がデータを集めると思われますが、そのデータをフォーマット統一して、エラーにならないデータに加工する作業が、前提として必要になります。こうなると、折角 RPA ツールにより業務部門でロボット開発が行えるようにできた企業でも、そのデータのクレンジング作業などが自分の部門だけではできない場合、あまり効率的ではありません。

やはり、現場がそのデータの内容を一番よく知っているのが、業務担当がデータを準備できると一番よいでしょう。

こうした背景からか、データ準備をそのまま英語にした「データプレパレーション (Data preparation)」という用語が注目を集めています。

データプレパレーションによって、データの正規化、標準化を実施して、データの品質を保つことこそ、業務自動化においてエラーを出さないための前提条件であることが、再認識されています。

こうしたことは、エクセルで加工できるレベルや量なら問題はないのですが、ビックデータを扱うような AI であれば、システム部門を中心に ETL ツール等を利用したり、そのためのプログラムを開発して、データ品質を保つように実施されてきていたと思われます。

そんな中、RPA ツールが現場に浸透してきたように、データプレパレーション用のツールとして、コーディングなしで、現場でも使いこなせるような優秀なツールが多く登場してきました。

BI や、ETL ツールのベンダーの中には、このデータプレパレーション分野をターゲットにマーケティングをしている会社も増えてきました。

今後は、AI や RPA とともに、ますますこの分野の需要は高まることでしょう。

このデータプレパレーション用のツールが浸透することにより、ETL や BI の分野で培われたノウハウが活用され、エクセルのようなオフィスツールに近づき、業務担当者がデータの加工・整形ツールとして使いこなせる時代が当たり前になるのかもしれない。